婦人の目

キリストの十字架

藤屋紀子

私たちの教会の屋根にも十字架が取りつけられ、枝の主日にその祝別をする段どりになっている。考えてみれば、二千年来、十字架は教会の必需品としてなくてはならないものとなっている。しかし、キリストのつけられた十字架は、本当はどんなものであったのか。

長男はその大きな等身大の十字架上のキリストを見た日「ちょっと待ってネ。今すぐ救急車を呼んであげる」といって、その場に立ちつくしていた。

しかし、私たちは四旬節に入り、ごく自然に典礼に合わせ、十字架の道行きをしたりミサに参加し、とにかく一時間がまんし、最大限妥協して帰ってくる。

もしかしたら、キリストが水の上をそれは単純に歩かれたように、キリストの十字架もごく当然なものとして受け入れているのではないかという気がしてくる。

表面的な、世間的な、問題のない生活、そこからおっかなびっくり首を出し、ちらっと現実を見渡す。あぶなげない道を当然選び、もし、自分の望みのすべてでなくても、その一つが打ち砕かれても、「真理とは何か」と疑惑と不信が心にうずまいてくる。

私たちがキリストの十字架刑の現場にいあわせたら、いったいどんなものだったのだろうか。

キリストの十字架には、永遠にあの主の啓示がある。そこには、いん石のように私の感じと思いの中に私が閉じ込められるのではなく、その中に突入してきて私に出会い、私の考えをいつも根本的に変える一つの事実がある。

あのキリスト、いわくいい難い私の心に迫るキリスト、あの十字架におけるキリストを思う時、「十字架とは何か真理とは何か」と問い続けるのではなく、私もまた「そこから何かが出来る」と、その上に前進のために足を置く人間になろうと願う。十字架の上で苦しみあえぐキリストに従うものになろうとすることへの、激しい招きの声がきこえてくる気がする。

（主婦）